

11



軍事・銃後・青年・婦人の各部が置かれた。この年四月、米・みそ・醬油・油・マッチ・木炭・砂糖などの生活必需品が統制となり、配給品となったのであった。

そして昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本軍は真珠湾を空襲、マレー半島に上陸を開始、ついにアジア・太平洋戦争へと戦線を拡大した。言論はもとより、国民生活のすべてが統制下におかれた。十七年六月十八日におこなわれた京都市会議員総会において「全員一致翼賛市会の進展に挺身する」と決議したように、革新京都の声も、一時逼塞を余儀なくさせられたのであった。国民勤労報国令（十六年十一月）により、学生の勤労働員も日常的なものになって、物資の不足から半休業状態となっていた生菓子屋の従業員や西陣の職人も軍需工場の職工として労働奉仕に出ていったのである。

昭和二十年（一九四五）三月九日の、死傷者十二万、二十二三万戸焼失という東京大空襲をはさんで、京都でも一月から五月にかけて、五次の空襲を受け、死者三十六、被災家屋四十八を出した。そのため、三月と八月に学童疎開が実施され、学校ごとに集団で府下の各地へ疎開していったのである。また市内建造物の取り壊し、すなわち建物疎開もなされた。密集家屋を撤去し、それによってできた空間を防火線・待避所にしようというものである。御池・<sup>おひけ</sup>五条・堀川という現在の幹線道路は、この建物疎開によって生まれたものである。こうして人も物も消耗し尽くして、日本は八月十五日の敗戦を迎えたのであった。





馬町の空襲跡(「写真でみる京都100年」より)

## 伝統と革新の都市

革新京都の出発 平和をめざす京都の再出発とともに、昭和二十年(一九四五)九月、連合軍の進駐が始まり、都ホテルや市勸業館等の主要な建物が接収された。当初は御所や桂離宮なども候補とされたが、交渉が成功してこれらを立入禁止の「聖地」と指定することができた。接収個所のほとんどはサンフランシスコ講和条約の発効(二十七年四月)までに返還されたが、植物園のみは三十二年まで接収が続けられた。

二十二年(一九四七)五月三日、新憲法が施行されたが、その前の四月に、第一回の統一地方選挙がおこなわれた。この男女同権選挙による初代の京都市長には神戸<sup>かんべ</sup>正雄<sup>まさお</sup>(京大名誉教授)が当選した。神戸市政の最初の仕事は、全市中の七十二カ所に区役所出張所を設置したことであった。これは従来の町